

即無生の第一義に達すれば、終日佛を念じても恒に眞性に順じ、終日生を願じても常に妙理に會することが出来る。それが即ち如來禪で、即ち諸佛の共に印可する所の定で、即ち無上深妙の禪門であるといふことを主張したので、慈愍三藏や、飛錫など、全く同一の理事雙修の思想である。

法照が慈愍三藏の説を承けたことは、五會法事讚の中に慈愍三藏の般舟三昧讚を引いてゐることによりて、それを立證することが出来る。飛錫とは殆んど同時代であるから、無上深妙禪門の説は果して孰れが唱道したか、詳にすることが出来ぬ。或は法照の方が飛錫の説に賛同したのかも知れぬと思ふ、承遠の説は分らぬけれども、矢張り理事雙修の立場に居たものと想像される。して見れば法照は此等諸師と同一の考を持つて、南宗禪に對抗して大に音聲語言の佛事を鼓吹されたものと見ることが出来るのである。

印度學序論

——(ウイリアム氏印度教第一章)——

前田 聽 瑞

印度國名の由來

今は昔、中央亞細亞から移住し來つた大アーリヤ(Aryan)民族

の一部は印度に通ずる山脈を乗り越へてシンドウ河(Sindhu 身毒、申度、眞定、信度、辛頭)——今はインダス河(Indus)と呼ばれてゐる——に近い地方に出現した。波斯人は此のシンドウといふ言葉をヒンドウ(Hindu)と發音し、彼等の同胞たるアーリヤ人をヒンヅース(Hindus)と名づけた。希臘人——恐らく、彼等は波斯人から初めて印度なるものを知つたのであらう——は此の困難な氣音 h を捨て、ヒンヅースをインド(Indoi 印度)と呼んだ。

ヒンヅー、アーリヤ人種が恒河流域ガシズの平野に定住して以來、波斯人はパンヂャープ(Panjab 五河地方)とベナレス(Benares)間の全地方に對して、ヒンダスタン(Hindustan)即ち「ヒンヅースの住所」といふ名稱を與へた。此名稱は尙ほ擴大されて普通頻闍耶山脈(Vindhya)地方に至るまで、特に回教徒に依つて否な更に印度の他の地方にさへ誤用されるに至つた。けれども印度の古典的名稱は普通梵語文學に用ひられ、又梵語を用ゆる種族全體の認むる所によるとバーラタ(Bhārata)或はバーラタ、ヴァルツヤ(Bhārata-Varsha)時には又バーラタ、カンダ(Bhārata-Khanda)とかクマーリカー、カンダ(Kumārīkā-Khanda)とも云ふのである。これは、畢竟邈焉たる古代に於いて大版圖を支配してゐたと云はれてゐるバラタ(Bhārata)の王國といふ意味である、而して、摩拏(manu)の法典では、ヒマラヤ山

脈と頻闍耶山脈との間の中央部地方全體に對してアーリヤ、アルタ(Arya-varia)即ちアーリヤ人の住所といふ名前を附けてゐる。そうして此名稱は又印度のある特定の地方に對する古典的名稱でもある。印度全體に對する他の名稱は梵語の詩の中に見受けられる閻浮提(Jambu-dvīpa)である。けれども嚴密に云へば此閻浮提といふ名は全地球の詩的名稱であつて、印度はその中の最も重要な部分と考へられて居たのに過ぎないのである。

印度の人口と住民

印度の人口は壹千八百九十二年には二億八千八百十五萬九千六百七十二人を算してゐる。かゝる莫大な人間の集合は無論一國家を形成すべくもない。印度は歐羅巴の如く殆んど一大陸をなしてゐる。幸か不幸か印度の豊饒なることは人口過多のために領土の狹隘を感じた亞細亞や歐羅巴の各地方から移住者や侵入者を早くも原始時代から續々引きつけた。

それゆゑ印度の住民は大陸の住民程に種類を異にして居り、又等しく各々異つた言葉を使用してゐる。

(私註) 印度では十ヶ年毎に國勢調査が行はれる。最近の調査は壹千九百十一年三月十日に行はれた。之れに據ると印度の人口は三億二千五百萬人である。すると約二十年以前の二億八千八百十五萬人に較べると二千六百有餘萬人の増加である。三億二千五百

萬人と云へば吾が帝國全人口の約五倍に相當する譯である。

原始移住民

先づ最初原始移住民——移住民の起源をなしてゐる若干のシンアン (Scythian) 人や蒙古人——が來た。而して彼等はすべて所謂ツラニアン (Turanian) 人種の下に概括されるもので、中央亞細亞及び韃靼西藏の草原から陸續として印度に侵入し來つたのである。而して彼等の多くは西北の五河地方に接する山道を通つて來たが、中にはブラフマ、ブトラ河 (Brahma-putra) の上流をなす東北の山峽から侵入して來たのもある。

ドラビダ人種

印度南部のドラビダ (Dravida) 大人種は實に初期移住民中の最も勢力あるものである。そうして此ドラビダ人種なるものは恐らく叙事詩の中に見ゆる羅伐那 (Ravana) と尾毗遮那 (Vibhishana) とを象徴化したものであらう。が然し印度の簑林や山丘に住んでゐて、而して詩の中では猿として謳はれてゐる彼の極めて未開な土蕃民族と同一視してはならぬ。

アーリヤ人種の移動

次にアーリヤ即ち「高貴」と自稱する原始的家庭の急速なる發達と擴大との爲めに生じたアーリヤ人種移動の大潮流は先づ溢れてヒンダスタン平原を襲來した。而して彼等は亞細亞に於いてはサンスクリット (Sanskrit) プラー

クリット (Prakrit) ツアンド (Zand) ヲルシヤ (Persia) アメニア (Amenia) 語の共通なる語源であり、歐維巴にありてはヘレン (Hellen) イタリア (Italy) ケルト (Kelt) チュートン (Teuton) 及びスラブ (Slav) 語の起源である一言語を操つてゐた。原始ツラニアン種族よりも少し時代は遅れるが彼等と同じく中央亞細亞の高原——恐らくボカラ (Bokhara) に近いオックス (Oxus) 河の源流地附近であらう——から巢立ちをした彼等アーリヤ人はそれ／＼分かれて歐羅巴や波斯さては印度へと殖民したことであつた。

インド、アーリヤ人　インド、アーリヤ人は移住民の本隊から別かれた後、インダス河、バンヂャーブの五河及び神聖なるサラスバチ (Sarasvati) 河の附近に止まつて農夫となつた。これは恐らく西曆紀元前二千年から千五百年までの間のことであらう。これ等の七つの河はサブタシンドウ (Sapta Sindhu) と呼ばれてゐる。ゾアンド語ではハプタ、ヘンジー (Hapta Hendu) といふてゐる。其後彼等は恒河流域の平原に續々侵入してアーリヤ、ヅルタと呼ぶ地方に蔓り、纏がて中央印度全部を占領するに至つた。而して前住の原住民族と提携し否な彼等を宛然アーリヤ化し、若しこれに反抗するものはすべて南方又は山間の僻地に追放した。彼等アーリヤ人は印度に於ける道德的知識的進展並に文化に對する最初の運動者であり、ドラビダ移住民はその創始者であ

つた。

其後の印度侵入者と波斯との通商貿易 併し印度は大アールリヤ種族に占有さ

れた後でさへも、尙ほ容易に各有力なる侵入者の餌食となつた。ヘロドタス (Herodotus) に従へば印度はダリウス、ヒスタスセス (Darius Hystaspes) に依つて征服されてゐる。此征討は恐らく西暦紀元前五百年頃に起つたのであらう。しかも、それは極めて一小部分に過ぎなかつたに相違ない。従つてパンヂヤープ、シンドウ一帯を含むインダス河流域の平野以外には及ばなかつた。

此の征討に次ぐものは、かなり後代のペルシャ印度間の通商貿易であらう。而して此商業上の交通に依つて多くの宗教的將た哲學的新思想が印度に紹介されたのかも知れぬ。又彼の阿育王の勅令やその碑文(紀元前約二百五十年)のアルハベットは現に一般にフェニキア (Phoenicia) のアルハベットと關係があると考へられてゐるが、恐らくフェニキアのアルハベットの紹介も此商業上の交通に基くものであらう。

亞歷山大王の遠征 アレキサンダー大王ガイנגダス河畔に至る遠征は一層確

實なる史實である。時は紀元前三百二十七年のことである。歐洲人が印度の西北部並に希臘軍がニールチャス (Nearchus) に指揮されて舟で下つたといふ五河地方に關す

る信すべき最初の報告を得たのは此遠征の賜であつた。セロイコス、ニケーター (Seleukos Nikator) —— 亞歷山大王の相續者で、又西曆紀元前三百十二年頃には、ユーフラチース (Euphrates) 河インダス河間全領土の支配者でもあつた —— の使者として華子城 (Pāliputra 今のバトナ Patna) に於ける栴陀羅掘多 (Candra-gupta 月護) の宮庭に滞在してゐたメガスセネス (Megasthenes) は長い間茲處に留つて彼のストラボ (Strabo) プリニー (Pliny) アライアン (Arian) 及び其他の人々が利用した報告を深く蒐集するところがあつた。

パーシーの印度入り　長い年月を経てパーシー (Parsi) が移住して來た。波斯人の此小種族は紀元七世紀にカリーフ、オマル (Khalif Omar) の統率せるマホメット教徒に征服されて、その本國から追放されたのである。吠陀の宗教に類似した波斯の古代宗教に歸依してゐた彼等は其信仰の記録たる豫言者ゾラスター (Zoroaster) の聖典ゾアント、アヴスター (Zand Avastā) を携へて約壹千壹百年前スラト (Surat) の附近へ居を定めた。而して大商人となり大造船家となつた。二三百年間は吾々は彼等の歴史に就いて知る所がない。彼等の宗教は決して新信者を歓迎せない。従つて彼等の仲間は少しも増加することはなかつた。又彼等はアーリヤ人の人々と雜婚することもなかつた。

つた。それゆゑ彼等の數は今日でも尙ほ約七萬に過ぎない。さりながら、彼等は歐洲人に劣らぬ多忙な企業好きの習慣からして、孟買市及び西部印度の人々の中で重要な社會的地位を占めて居る。

(私註) 波斯教の聖典アヴスター、ツアンド(Avasta Zand)の名は元來アヴスター即ち原典とツアンド即ち註釋書との二字から出來てゐる。註釋書といふ意味を持つたツアンドといふ名辭は其後パーシーの聖典が書かれてゐる言葉そのものをいふことになつた以上はウィリアム氏の末註であるが通常波斯教の聖典は今日ゼンド、アエスタ(Zand Avesta)といふ名で呼ばれてゐる。「東方聖書」第四、第二十三、第三十一卷には其譯が載せられてゐる。

回教徒の印度入り 次に回教徒、亞刺比亞人、土耳其人、亞富汗人、蒙古人、波斯人が來た。爾來彼等は屢々印度に入り來つたのである。今や彼等は五千八百萬人即ち印度全體の人口の約五分の一を算するに至つた。

(私註) 今日では回教徒の總數は實に六千六百萬餘を算することであらう。

然し、彼等の大多數はヒンヅーの子孫であつて回教に改宗したものである。彼等は其政治的手腕に於ては優ぐれてゐたけれどもヒンヅー人がその前住者の位置を乗り取つたやうに、ヒンヅー人を征服することが出來なかつた。加之回教徒は其印度問題に就いては大抵の場合無干渉の態度を取るものが其政策であつたのである。だから印度の回教徒は、我る程度までヒンヅー化され、又言語習慣性格等に於いても彼等が

ヒンヅー人に與へたよりも寧ろヒンヅー人より採る方が多かつた。

ヒンヅーの風尙と印度の不統一

尙ほ又ヒンヅーの風尙は葡萄牙、和蘭、デンマ

ーク、佛蘭西さては英國などの諸國から盛んに歐洲の思潮が流れ込んで來たのにも拘らず、依然として其風尙を持ちこたへて行つた。そうして英國人は全印度に擴がつて曾つて回教徒ムスリムが左右したより、より以上の大なる政治上の主權を握つたが、しかし其在來の住民と融和しなかつたことは回教徒以上であつた。水と油とが融合せないと同様に現今印度に於ける統治者と被統治者とは決して結合一致せない。印度人口の大多數は實際尙ほヒンヅー人であつて所謂インド、アーリヤ民族の道德的感化は尙ほ隆盛を極めて居る。

印度の不統一と民族

ところが、此種族は到底統一された一國家を成立するこ

とが出来ぬ。かの歐洲アーリヤ民族が曾つて種々に分かれ又現に區々たる類別があるがやうに、この民族にも多くの異なる種族があるのである。かゝる不統一には幾多の原因がなくてはならぬ。印度アーリヤ民族は相次いで侵入し來つたがために、丁度かの希臘人と羅馬人とがケルト人とチュートン人とに異つてゐるがやうに、印度に於いても初期の侵入者と後期の侵入者との間には越へることの出来ぬ溝がある。

それから氣候の變化がその性格を變へる上に頗る有效であつた。加之、非アーリヤ民族たる土蕃民族、回教徒及び歐洲人との接觸のために、印度各地に於けるアーリヤ民族は種々なる影響を受けたのである。假りに非アーリヤ民族に就いて云つても亦たその間に大なる相違がある。彼等土蕃民族は先づ大體ドラビダ人種とコラリア(Coraia)人種との二つに別かれ、此兩種族は共にツラニアン(Turanian)と概稱さるゝ世界的住民の一部に屬するものであるが、ドラビタ人種は既にほのめかして置いた通り、彼等が獨立した文明を建設し又幾分か宗教風俗習慣に於いてもヒンヅー化された點よりして最も重要視すべき民族である。然しコラリア人種は依然としてその未開なる土蕃状態を續けてゐる。

印度の不統一と言語

だから、先づアーリヤ民族と非アーリヤ民族とを考究し、更に言語の相違といふものが民族を必然的に決定的に區別するものではないが、少くとも人民を永久に分離するものと考へると、印度に於ける人々は十四種に區別することが出来る。これに依つて所謂十四の國籍は構成されてゐるのである。次に、これ等の人々を特徴づける十四種の言論を擧げる。

(一) ヒンデイ語(Hindi)　これはヒンダスタン地方にのみ用ひられてゐるもので、此

言葉を使用してゐるものは實に壹億二千萬人を算する。此のヒンディ語の中には高等ヒンディ語(私註、梵語から脱化したものである)と常に回教徒の用ゆる波斯語と亞刺比亞語とを混交せるヒンダスタニー語(Hindustani)其他ブラジュ語(Braj)カノジイー語(Kanauji)メヴリー語(Mewari)古ブールビー語(Old purbi)アヴディイー語(Awadhī)ボジニブリー語(Bhojpurī)さてはシヨドブル(Jodhur)地方のマールグリー語(Marwari)の如き他の種々のヒンディ語系に屬する地方語を含んでゐる。就中最後のマールグリー語は恐らく最も注目するに足るものであらう。

(二)ベンガリー語(Bengali) この言葉はベンゴール州に於ける約四千二百萬人々に用ひられてゐるものである

(三)マラーテイ語(Marathi) 此言葉はデツカン(Dekhan)高原地方のマハーラーシュトラ(Maharashtra)に於ける約二千百萬の者に用ひられてゐるものである。此の中にはコンカニー語(Konkani)として知られてゐるコンカン(Konkan)地方の方言をも含んでゐる。

(四)グジャラーテイ語(Gujarati) これはグジャラート地方に於ける約壹千百五十萬の人々に話されてゐる言葉である。

(五) パンジャビー語 (Punjabi) これはパンジャブ州に於ける約壹千六百萬の人々に用ひられてゐるものである。

(六) カシユミール語 (Kashmiri) これはカシユミール州に於ける約三百萬人の人に依つて用ひられてゐるものである。

(七) シンデイー語 (Sindhi) これはシンド地方に於ける三百萬人ばかりの人に用ひられてゐる。

(八) オリヤ語 (Oriya) これはオリッサ (Orissa) 地方に於ける約八百萬の人に用ひられてゐるのである。

以上八種の言語は所謂インド、アーリヤンと呼ばれてゐるアーリヤ民族の各種族に屬するものである。

次に非アーリヤ民族を擧げ、更にこれを六種族に分けて其言葉の名稱に依つて記載しやう

先づ第一に約五千八百萬人をも算する所謂四大ドラビダ人種を擧げると次の通りである。

(九) タミル語 (Tamil) これは六百萬人ばかりの人達に使用されてゐる言葉で、其使

用區域は錫蘭島の北部を筆頭に、北方コモリン(Comorin)岬からトラバンコール(Travancore)の南部及び所謂カルナチック(Karnatic)即ちマドラス(Madras)の北約百哩の地點にあるコロモンデル(Coromandel)海岸の南部に及んでゐる。

(十) マラヤールラム語(Malayalam)　これはタミル系の方言とも見るべきもので、トラバンコール及びマラバル(Malabar)海濱の南部一帯約六百萬人に依つて話されてゐる。

(十一) テルグ語(Telugu)　この言葉は發音の軟らかな點からして印度の伊太利語イタリと呼ばれて居る。マドラスの北部一帯からコロモンデル海岸の北部即ち北サーカス(Circars)及びニザム(Nizam)の領地の一部に至る約二千萬人の間に使用せられて居る。

(十二) カナリース語(Kanarese)　これはマイソール(Mysore)と孟買州の南部とカナラ(Kanara)及びマラバル海濱の一部に於ける約一千萬人に用ひられてゐる言語である。尙ほ茲に半ば洗練されたドラビダ人種の方言が二つある。即ちカナラの一小地方に用ひられてゐるツル語(Tulu)とマイソール西部の丘陵地方に於ける僅か十五萬人に用ひられてゐるコールグ語(Koors)——或はコダグ語(Kodagu)ともいふ——この二つ

である。然しこれ等は國語として擧ぐるに足らないものである。

次に未洗練なドラビダ人種使用の主なる言葉を掲げることとする。

(三) ゴンド語 (Gond) この言葉は二百萬足らずの土蕃人民の間に使用せられてゐる、而して彼等土蕃人は數部族に分かれてゐて、中には殆んど野蠻人に等しきものもあれば、又中央地方ゴンドヴァナ (Gondwana) に住んでゐる比較的開化したものもある。ゴンド人の言語は近來組織立てられてデバナীগリー (Devanagari) 風に表現されるやうになつた。序にゴンド人の言葉がドラビダン風であるから、ゴンド人はドラビダ人であるとは云へぬ。これはコルニッシュ (Cornish) 人が吾々英國人の言葉を使用してゐるから彼等は英民族だと云へないのと一般である。

今一つの未洗練なドラビタ人種の方言即ちオラーオン語 (Orion) やラージュマハル語 (Rajmahal) やコンド語 (Khond) やトダ語 (Toda) やクタ語 (Kuta) などは「民族」といふ字を冠するに足らぬ程の種族の間に使用せられてゐるものである。

最後に、全く未開野蠻な非アーリヤ民族非ドラビダ人種の方言を擧げると次のやうである。

(四) コラリアン語 (Kolarian) これはチヨター、ナグプール (Chola Nagpur) の高原に住する

コールス(Kols)人といふ約三百萬人以上の間に通用する言葉である。そうして彼等はザット七つの粗野な方言を用ゐる。その中で最もよく知られてゐるものはコールス人と、ジュアーンダス(Juangs)人——(全印度に於ける最古の種族)——とサントールス(Santals)人と、ムンダス(Mundas)人とそうしてホス(Hos)人との方言である。

而して、印度の邊境諸邦に屬する言葉即ちアフガーニスタン(Afghanistan)のバシュツ語(Pashtu)——或はバクツ語(Pakhtu)とも云ふ——ネポール國(Nepal)のネバーリ語(Nepali)——或はネバーリース(Nepalese)とも云ふ——アッサム(Assam)洲のアサミース(Asamese)英領ビルマのブルミース(Burmese)及び錫蘭のシンハリース(Sinhalese)の如きは全く上の列擧の中には入れない。此外ネポール、ブータン(Bhutan)並びにアサム(Asam)の山中に住居してゐる種族——(彼等の中には所謂ヒマラヤ族に屬し又多少チベット系統を帯びてゐるものもある)——に依つて使用されてゐる方言が殆んど無數にあつて、かのカスト博士(Dr. Cust)に従へば全印度及び其邊境の地に於ける開未開の言葉方言の數は實に五百三十九を下らないとのことである。

印度の不統一と社會制度 然し印度に於いては民族と言葉の相違から起つた不統一の外に、かの文化的種族間に敷かれたる社會制度が印度をしてより不統一に

陥らしめた。即ちこれ等數種の開化的種族間に於ける社會的階級の大別小別は歐洲のそれよりも、より迅速に而かもより鞏固なる境界線を以て結晶したのである。かのヒンダースと一名の下に呼ばれ且つ同一言語を用ゆる地方に於いてさへも、階級規定が敷かれて、無數の獨立せる社會が作られ、其獨立孤立を主張することを以て誇りとしたのである。

印度と宗教

茲に於てかかゝる民族と言語と社會的慣習とが如何にして宗教

の信條に影響を齎したかとの問題が生じて來る。全印度に亘るヒンヅー民族には其間に幾多の相違がある。而かも唯一つの宗教的信條は印度アーンリヤ民族の各移住者に對して根本的統一をなす有力なる證據を與へてゐる。それと同時にその宗教的信條が廣大なる印度に擴がりつゝ其間に種々なる變化を蒙つた有様を忠實に傳へてゐるといふことは注意すべきことである。而して其宗教的信條は今尙ほ或る言語や文學の中に保存されてゐるのである。然り而して、此の信條は原始的單純なる萬有神教的教理に基いてゐる。しかし、それは又實に無數の多神的迷信に分岐してゐる。印度の聖樹無花果が一本の幹から無數の枝を延ばし、其枝地上へ根を下ろし、自ら一本の木となり、遂に母木はそれ自身の枝條から出來てゐる濃密なる繁みの中に埋もるゝ

に至るが如く、此萬有神教的信條は充分印度人心にその根を下ろし、その分枝を頻りに擴げ、それがために其根本教理の質朴さは非常に發達せる奇怪なる神話の繁みの中に失はれてゐるのである。

印度宗教の根本教理

吾人が短刀直入此の根本教理を要約するためには其派

の哲學者に依つて高唱さるゝが如く三つの語よりなる一個の形式即ち *Ekam eva ad-*
vitvam (唯一にして第二あることなし) を借るに如くはない。梵 (*Brahman*) と呼ばるゝ唯一の宇宙的精神の外眞に存在するものは無い。この精神から離れて存在すると考へられるものは總べて幻影である。これ實に波羅門教の動かすべからざる信條である。正統的印度哲學に従へばその信條は唯一眞實の吠陀である。少くとも教育あるヒンヅー人一般の信仰よりすれば所謂その信條なるものは吠陀 (*Veda*) が導く唯一眞實の知識である。

通俗的な印度教

これに反して、通俗的な印度教 (*Hinduism*) は此信條を智導 (*Upana-*

marga) 即ち解脱の最高方法として認容してゐるやうであるが、尙ほこれに他の劣つた二つの方法を附加してゐる。

第一は業道 (*Karma-marga*) で犠牲や儀式や沐浴や苦行などの効果に對する信仰であ

る。第二は信道(Bhakti-marga)で、人格神への信仰である。序にこの信(Bhakti)といふ語はウパニシヤットの禮拜(upasana)に相當する。

加之、この通俗な印度教はその多神説、偶像崇拜及び階級差別の様式を説明するために、唯一の宇宙的實在は虚妄の相を現するものだと考へ、又この唯一の宇宙的實在は虹に於ける光線のやうに種々の姿を現はすものだと考へ、或は又神、惡魔、半神、善惡の靈、人類動物は愚ろか、あらゆる一切の感覺的有形的の物質は神からの流出物であつて、畢竟神の本體に再び歸入さるべきものであると假定してゐる。それ故に此眞智と通俗的な教理とを結びつける道程には幾多の屈曲がなければならぬといふことは容易にうなづかられ得るところである。又印度教の叙述にしても世人周知の殆んど一切の宗教的哲學的思想に觸れてゐないものは十分とするに足らないといふことも眞に斷言し得る所である。然り、印度教は吠陀から出發して、あらゆる宗教から何物かを採り來り、そうしてあらゆる人間に適合する形式を現はすに終つてゐる。印度教は眞に寛容的であり温順的であり、包括的であり又吸收的である。又印度教は精神的と物質的、顯教的と密教的、主觀的と客觀的、合理的と非合理的、純的と不純的との各兩面を有して居る。印度教は大なる多角形又は不規則なる多邊形に譬へることが出

來る。一邊は實際的であり、一邊は純道德的であり、一邊は敬虔的であり空想的である。又一邊は感覺的肉慾的であり、一邊は哲學的思索的である。儀式的奉仕に甘んじてゐる人々は印度教を以て十分に足れりとしてゐる。行業の効果を否定し、信仰をして唯一の必要物たらしむる者も印度教の域外にさ迷ふに及ばない。肉感的對象に耽る者も亦た其趣味を満足させることが出来る。而して神と人との本性、物質と精神との關係、個物存在の神秘さては惡の起源に就いて冥想するを悦ぶ者は又これ等の思索に没頭することが出来る。殆んど無限の擴大をも受け納れる印度教の能力は如何なる特殊の教理の信奉者をも包容して少しも洩らす所がない。斯くの如き豊富な變化性と宇宙的受納性との楔子である印度人の宗教的信仰は實際簡單なる性質を持つてゐない。若しその萬有神教的方面から見ると婆羅門教 (Vakū Brāhmanism) と云へるし、又多神教的方面から見れば印度教 (Hinduism) とも呼び得る。然し、これ等の名稱は共に土蕃人民に依つて承認されてゐるものではない。

然らば斯くの如く何物をも包容して餘すところなき該博と雜多とが印度教の本質とすれば茲に明瞭にして而かも十分な印度教の簡潔な叙述を與へることが出来るであらうか。斯くの如きは唯徒らに讀者を印度教の迷宮に引き入れるのみである。

印度教と梵語文學

既に述べたがやうに、印度は五百以上の方言を有してゐるが、如何に種族や言語や階級や信條の上に於いて異つてゐても等しく印度教の遵奉者に依つて尊敬せられ受納されてゐる唯一つの神聖なる言語と唯一つの神聖なる文學とを持つてゐる。その神聖なる言葉とは梵語(Sanskrit)でありその神聖なる文學とは梵語文學である。その文學は最も廣い意味に於いて吠陀即ち知識の唯一の倉庫である。印度の神學哲學法律及び神話學の唯一の運搬車である。印度の信條臆見風俗慣習が忠實に映出された唯一の鏡である。而して若し第四の譬喩が許されるならば俗語を改善し或は重要な宗教的又は科學的思想を表現するための必要なる材料が得られる唯一の石切場である。

歐洲に於いては文學は國語と共に變化する。而して現代の方言はそれごとくそれ自身文學を持つてゐて、而かも其文學は其人々の現在の宗教的社會的及び智力的狀態を知るには格好の代表物なのである。伊太利人を知るためにはその現代文學が操つれたら別にラテン語を研究する必要はない。併しヒンヅの地方語恐らくタミール語は別だが、文學は未だ文學といふ名前を附ける資格は殆んど無い。大抵の場合それは單に梵語の副産物である。ヒンヅ人を知り、或は彼等の過去及び現在の狀

態を理解し或は又彼等の心情や心靈そのもの、研究には吾人は是非梵語文學を攻究しなければならぬ。實際梵語文學は印度にとつては、古典的教父學的文學が宗教改革當時の歐洲に於けるよりも、より以上のものなのである。梵語文學は極めて深く印度人心に喰ひ入つてゐるもので、従つてあらゆる印度人は如何に無學なものである、不知不識の間にそれに感化されてゐる。

梵語文學

けれども梵語文學には特に卓越した神聖なる、或る部分がある。それは天啓 (Srutī) と傳承 (Smṛiti) との二大部門である。

第一の天啓——直接に聽かれ或は啓示されるものは——吠陀の三部分即ちマントラ (Mantra) とブラーフマナ (Brahmaṇa) とウパニシャッド (Upanishad) とを含んでゐる。ウパニシャッドは見集 (Darsana) 即ち哲學體系の源泉である。此の (Srutī) は直接的啓示と同じもので、人間の作つたものでないと思はれてゐる。

第二の傳承——傳説に依つて記憶せられ又は傳へられるもの——は直接的啓示に基いてゐるものだと思はれてゐるが、人的著者に依つて叙述されたものと考へられる。最も廣義に解釋すると、此傳承は四部門に分かれてゐる。後期吠陀の殆んど全體を表示するものと云つてよい。其四部門といふのは大體次のやうである。

(A) 六吠陀支分 (Vedāṅgas) 第一は儀軌經 (Kalpa) —— 或は隨聞經 (Sautā-Sūtras) をいふ —— で、これはマントラやブラーフマナを吠陀の祭式に適應するための規則書である。第二は式叉論 (Śikṣā) で、これは音韻學のことである。第三は闡陀論 (Chandas) で、これは詩法のことである。第四は尼鹿多論 (Nirukta) で、これは吠陀の字解のことである。第五は毗伽羅論 (Vyākaraṇa) で、これは文法のことである。第六は豎底沙論 (Tyōśha 樹提) で、これは天文學のことである。

(B) スマールタ經 (Smārta-Sūtras) —— これは家庭經 (Gṛhya-Sūtras) 即ち家禮に關する規則書とサーマヤーチャーリカ經 (Sāmāyācārika-Sūtras) 即ち日常の慣例に關する規則書の二つに分かれる。

(C) 法律論 (Dhārma-Sāstras) —— これは摩拏 (Manu) ヤーチュナバルキヤ (Yājñavalkya) 又は他の所謂神聖な立法者の法律を指すのである。これ等はスマールタ經から發達したものだと思はれる。

(D) 信仰論 (Bhakti-Sūtras) —— これは伊底訶婆 (Ithāsas) 即ち史話例へばマハーバーラタ (Mahābhārata) といふ大なる叙事詩と、ラーマヤーナ (Rāmayāna) といふ他の大なる叙事詩とが含まれ —— (ラーマヤーナは超人の作に係るものとせられてゐる伊底訶婆と

いふよりも寧ろ名士の作品としての詩話(Kavya)と云ふべきものであるが——又十八富蘭那(Puranas)即ち昔物語並びにこれに附隨してゐる比較的劣等な十八富蘭那及び後世の阻特羅(Tantira)をも含んで居る。

印度學と梵文學の研究

梵文學のこれ等すべての部門を詳細に叙述するのは

吾人刻下の企ではないが、印度教の經來つた種々なる體系を理解するためには四部門の主要なる著書に就いて多少の智識を持つことが必要である。その四門部とは第一には吠陀の三分たるマントラとブラーフマナとウパニシャッドで、第二には見集即ち哲學體系で、第三には法律論で、第四には信仰論である。これ等四部の主要なる作物は印度の宗教的精神が通過し來つた各時代の發展を語れる格好の代表物で、そうして此れ等のものが相集つて茲に印度教なるものを形造つてゐるのである。吠陀の讚歌は自然崇拜と稱せられ得る宗教的發展の初期の産物である。梵書(Vedas)は犠牲及び儀式を説いてゐる。ウパニシャッドと見集とは合理的又は萬有神教的哲學とを高調してゐる。摩拏、ヤーヂユナバルキア及び法律書は階級と家庭の慣習とを明示して居る。而して伊底訶婆、富蘭那及び阻特羅とは人格神に對する受と信仰と教理とを説明してゐる。そうして印度教の説明にはこれ等代表的作品の中から時々必要な章句を翻譯して説明を補はなければ充分なものとは云へない。——一九二〇・六五——